官版

語彙活語指掌

完

815.4
M753k

078244-000-2

815.4-M753k

活語指掌

文部省編輯寮／編

M15
DAC-1864

文部省刊行

官版

語彙活語指掌

浪華　文盛書樓

245455

814.01 M75 2

活語指掌

言語のはたらきをうくるにふたつあり其一ハ詞の活用と辭の運用となり詞と云ふハあふおもふさくちる又あひおもふききちる（あひおもふきちるなどにあひにおもひに接きさきとおもを接けるにてこれを運用といふあひもおもひも用言なりこれを心えべしきゆうハ下條に示せ）の類なり辭と云ふハぞもてつけりけらむめりかなにをぞぞぜんの類なりおめぞぞおめひておもふらんがのへばなどのぞてらんぞこれ辭なり餘ハなぞらへて知るべし辭の運用のこと又其意味等ハ別記に解せ

詞の活用の數十四種あまでもまづ十種を示せ第一四段活用第二一段活用第三中二段活用第四下二段活用第五加行

變格活用第六佐行變格活用第七奈行變格活用第八良行四段一格活用第九くしき活用第十しくしき活用等の十種

第一より第八までを作用言といふ第九第十を形状言といふ なり

語學せむとおもはゞ十種活用の順序を上より下へ縦みよみあらひくそらふおぼゆべしそのよみぶりはさかむ、さき、さく、さけ、きむ、きる、きれ、おきむ、おく、おくる、おくれ、えむ、う、うる、うれ、こむ、き、く、くる、くれ、せむ、し、す、する、すれ、いなむ、いに、いぬ、いぬる、いぬれ、あらむ、あり、ある、あれ、あさく、あさし、あさき、あさけれ、こひしく、こひし、こひしき、こひしけれ、とよむべし

第一 四段活用

さかむ 将咲	おさむ 将押	たたむ 将立	あはむ 将逢	すまむ 将住	ふらむ 将降
咲 さき	押 おし	立 たち	逢 あひ	住 すみ	降 ふり
咲 さく	押 おす	立 たつ	逢 あふ	住 すむ	降 ふる
咲 さけ	押 おせ	立 たて	逢 あへ	住 すめ	降 ふれ
カ	サ	タ	ハ	マ	ラ
キ	シ	チ	ヒ	ミ	リ
ク	ス	ツ	フ	ム	ル
ケ	セ	テ	ヘ	メ	レ

本書活語の下にカキクケなどゝしるしたるが即これなり

第二 一段活用

きむ 将着	にむ 将似
着 きる	似 にる
着 きれ	似 にれ
キ	ニ
キル	ニル
キレ	ニレ

ひむ 将干	ひる 干	ひる 干	ひれ 干
みむ 将見	みる 見	みる 見	みれ 見
いむ 将射	いる 射	いる 射	いれ 射
ゐむ 将居	ゐる 居	ゐる 居	ゐれ 居

ヒ‖	ヒル‖	ヒル‖	ヒレ
ミ‖	ミル‖	ミル‖	ミレ
イ‖	イル‖	イル‖	イレ
ヰ‖	ヰル‖	ヰル‖	ヰレ

本書活語の下にキ‖キル‖キレ‖など〻志るしたるが即これなり

第三 中二段活用

おきむ 将起	おく 起	おくる 起	おくれ 起
おちむ 将落	おつ 落	おつる 落	おつれ 落
こひむ 将戀	こふ 戀	こふる 戀	こふれ 戀
うらみむ 将恨	うらむ 恨	うらむる 恨	うらむれ 恨
おいむ 将老	おゆ 老	おゆる 老	おゆれ 老
おりむ 下	おる 下	おるる 下	おるれ 下

キ‖	ク‖	クル‖	クレ
チ‖	ツ‖	ツル‖	ツレ
ヒ‖	フ‖	フル‖	フレ
ミ‖	ム‖	ムル‖	ムレ
イ‖	ユ‖	ユル‖	ユレ
リ‖	ル‖	ルル‖	ルレ

本書活語の下にキ‖ク‖クル‖クレ‖など〻志るしたるが即これなり

第四 下二段活用

えむ 将得	う 得	うる 得	うれ 得
うけむ 将受	うく 受	うくる 受	うくれ 受
やせむ 将痩	やす 痩	やする 痩	やすれ 痩
すてむ 将捨	すつ 捨	すつる 捨	すつれ 捨
ねむ 将寝	ぬ 寝	ぬる 寝	ぬれ 寝
そへむ 将添	そふ 添	そふる 添	そふれ 添

エ‖	ウ‖	ウル‖	ウレ
ケ‖	ク‖	クル‖	クレ
セ‖	ス‖	スル‖	スレ
テ‖	ツ‖	ツル‖	ツレ
ネ‖	ヌ‖	ヌル‖	ヌレ
ヘ‖	フ‖	フル‖	フレ

ほめむ 将誉	ほむ 誉	ほむる 誉	ほむれ 誉
きえむ 将消	きゆ 消	きゆる 消	きゆれ 消
かれむ 将枯	かる 枯	かるゝ 枯	かるれ 枯
うゑむ 将植	うう 植	うゝる 植	うゝれ 植

メ	ム	ムル	ムレ
エ	ユ	ユル	ユレ
レ	ル	ルゝ	ルレ
ヱ	ウ	ウル	ウレ

本書活語の下にエウウルウレなどゝあるへしつけるが即これなり

第五 加行變格活用

こむ 将来	き 来	く 来	くる 来	くれ 来

コ	キ	ク	クル	クレ

本書活語の下にコキククルクレとあるへしつけるが即これなり

第六 佐行變格活用

せむ 将為	し 為	す 為	する 為	すれ 為

セ	シ	ス	スル	スレ

本書活語の下にセシススルスレとあるへしつけたるが即これなり

第七 奈行變格活用

いなむ 将往	いに 往	いぬ 往	いぬる 往	いぬれ 往

ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ

本書活語の下にナニヌヌルヌレとあるへしつけたるが即これなり

第八 良行四段一格活用

あらむ 将有	あり 有	ある 有	あれ 有

ラ	リ	ル	レ

本書活語の下にラリルレとあるへしたるが即これなり

作用言のうち第三中二段活用第四下二段活用第六佐行變格活用等にいひかへて今と活用のたがひあり今といふは俗言の活用なり

中二段活用俗言格

おきむ 将起	おく 起	おきる 起	おきれ 起
おちむ 将落	おつ 落	おちる 落	おちれ 落
こひむ 将戀	こふ 戀	こひる 戀	こひれ 戀
うらみむ 将恨	うらむ 恨	うらみる 恨	うらみれ 恨
おいむ 将老	おゆ 老	おいる 老	おいれ 老
おりむ 将下	おる 下	おりる 下	おりれ 下

キ‖	ク‖	キル‖	キレ‖
チ‖	ツ‖	チル‖	チレ‖
ヒ‖	フ‖	ヒル‖	ヒレ‖
ミ‖	ム‖	ミル‖	ミレ‖
イ‖	ユ‖	イル‖	イレ‖
リ‖	ル‖	リル‖	リレ‖

本書活語の下にキクキルキレなどゝあるしたるが即これなり
圖面におきおくとひら假字にてあるせるはいふへし今もかはらざればなり
さるをおくるを今おきるといふ俗言なればこゝに圖してあらしむ

下二段活用俗言格

えむ 将得	う 得	エル 得	エレ 得
うけむ 将受	うく 受	うケル 受	うケレ 受
やせむ 将痩	やす 痩	やセル 痩	やセレ 痩
すてむ 将捨	すつ 捨	すテル 捨	すテレ 捨
ねむ 将寝	ぬ 寝	ネル 寝	ネレ 寝
そへむ 将添	そふ 添	そヘル 添	そヘレ 添
ほめむ 将譽	ほむ 譽	ほメル 譽	ほメレ 譽
きえむ 将消	きゆ 消	きエル 消	きエレ 消
かれむ 将枯	かる 枯	かレル 枯	かレレ 枯
うゑむ 将植	うう 植	うヱル 植	うヱレ 植

エ‖	ウ‖	エル‖	エレ‖
ケ‖	ク‖	ケル‖	ケレ‖
セ‖	ス‖	セル‖	セレ‖
テ‖	ツ‖	テル‖	テレ‖
ネ‖	ヌ‖	ネル‖	ネレ‖
ヘ‖	フ‖	ヘル‖	ヘレ‖
メ‖	ム‖	メル‖	メレ‖
エ‖	ユ‖	エル‖	エレ‖
レ‖	ル‖	レル‖	レヽ‖
ヱ‖	ウ‖	ヱル‖	ヱレ‖

24545

本書活語の下にエウエルエレなどゝしるしたるが即これなり

[illegible] 佐行變格活用俗言格

あん(じ) 将案	あん(じ) 案	あん(ず) 案	あん(ずる) 案	あん(ずれ) 案
ジ	ジ	ズ	ジル	ジレ

本書活語の下にジジズジルジレとしるしたるが即これなり

これまでの八種を作用言といふ次にあぐる二種を形状言といふ

第九 クシキ活用

あさ(く) 浅	あさ(し) 浅	あさ(き) 浅
ク	シ	キ

本書活語の下にクシキとしるしたるが即これなり

第十 シクシシキ活用

こひ(しく) 戀	こひ(し) 戀	こひ(しき) 戀
シク	シ	シキ

本書活語の下にシクシシキとしるしたるが即これなり如此(カクノ)片假字(カタカナ)もてしるしつゝその詞どもの活用をしらしむされど初學の徒はうち見てのみはさとりがたく覺ゆべければまづ(か)(き)(く)(け)、(さ)(し)(す)(せ)と順序をよみならはしむべきなりこれをよみならひえむたらんには作用言總圖をあらはして次に示す 皇國言の活用は五十連音におのづからかなへるものなるぞ作用言の所生をもしらせむとて作用言總圖となづく

この圖をそらによみならふべしさてさくはさ(か)む、さ(き)、さ(く)、さ(け)とはたらきて加行四段の活用なることゝしられまたおすはおさむ、お(し)、お(す)、お(せ)とはたらきて佐行四段の活用なることとあきらかにしらるゝなり

作用言總圖

白字なるハ活用せざるものなり

行						活用
阿行(アギヤウ)	あ	い	う	え	お	下二段
加行(カギヤウ)	か	き	く	け	こ	四段・中二段・一段・下二段・加行変格
佐行(サギヤウ)	さ	し	す	せ	そ	四段・佐行変格・下二段
多行(タギヤウ)	た	ち	つ	て	と	四段・中二段・下二段
奈行(ナギヤウ)	な	に	ぬ	ね	の	奈行変格・一段・下二段
波行(ハギヤウ)	は	ひ	ふ	へ	ほ	四段・中二段・一段・下二段
麻行(マギヤウ)	ま	み	む	め	も	四段・中二段・一段・下二段
也行(ヤギヤウ)	や	い	ゆ	え	よ	中二段・一段・下二段
良行(ラギヤウ)	ら	り	る	れ	ろ	四段・良行四段一格・中二段・下二段
和行(ワギヤウ)	わ	ゐ	う	ゑ	を	一段・下二段

次に活語指掌圖をひらきて示すその由は上にあげたる作用言總圖をおぼえ得たらむのち形狀言のあらましをもおぼえむがためなり作用言と形狀言とをまなびうれバ活用ざま一わたりハなにごとにもことたらざらむさてこの圖をよみおぼえむにつきてこゝろうべきことあり將然言としるせるその朱線のもとにつけるかぎりはまだあらむとする詞なりまづさ(か)む、お(さ)むとやうにむの辭をそへてみるにさ(か)とのこりいひては詞とてのなずまさよりつゞくるふたよりもなかりしされバ將然言のかぎりハこゝぐゝむの辭をそへたりかくざまによくなずらひ得バおのづから將然言の意もやゝしらるべけれどおぼつかなけれバぞかし次に連用言といふは用言より用言へつゞく詞なることをまなびしらしむ（この詞よりおほくハ用言へハつゞかず）さ(き)まはふお(し)やなどその詞ごとにしるしたるをよみつゞけてあぢはひしるべし終止言といふは語意こゝにきはまりていひをさまるなり連體言といふは用言より體言にはつゞく詞なるがゆゑにかくいふなり（この詞よりおほくハ體言へハつゞかず）さ(く)花、お(す)車と體言へいひつゞくるをいふその詞ごとにしるしたまへバよみつゞけあぢはひてしるべし已然言といふハもはやしかなりたることをいふ詞なり花こそハさ(け)、車をこそお(せ)といひ又花さ(け)バ車をお(せ)バなどの類なりたゞし

花さ(け)車をお(せ)どといへバ布求言使令言となりて又其意異なるで このことばをひとたびはなしてまたかへりてまたふでをまたことるいはず

將然言、連用言、終止言、連體言、已然言を詞の五階と名づく

さてこの五階を四段活用にてハ終止と連體とをかねて圖す一段活用中二段活用下二段活用にてハ將然と連用とをかねて圖す（これハ見やすくからしめむがため如此かねあはせて圖にあらはせるなり）良行四段一格ハもとより連體と終止とをかねたるなり（略圖せるハあらざるとあるべし）

活語指掌圖

將然言　連用言　終止言　連體言　已然言

朱線のところはまたるところハ兩階かねたるところとしるべし

段	語	將然言	連用言	終止言・連體言	已然言
第一 四段	咲	(か)む	(き) にほふ	(く) 花ハナ	(け)
	押	(さ)む	(し) やる	(す) 車クルマ	(せ)
	立	(た)む	(ち) そる	(つ) 人ヒト	(て)
	逢	(は)む	(ひ) みる	(ふ) 人ヒト	(へ)
	住	(ま)む	(み) まさる	(む) 家イヘ	(め)
	降	(ら)む	(り) くる	(る) 雨アメ	(れ)
第二 一段	着	(き)む ならそ		(きる) 衣キヌ	(きれ)
	似	(に)む かよふ		(にる) 人ヒト	(にれ)
	干	(ひ)む からぶる		(ひる) 麥ムギ	(ひれ)
	見	(み)む あきらむる		(みる) 書フミ	(みれ)
	射	(い)む とほそ		(いる) 箭ヤ	(いれ)
	居	(ゐ)む つく		(ゐる) 人ヒト	(ゐれ)

段	詞	將然(〜む)	連用(續く詞)	截斷	連體	體言	已然(〜れ)
第三 中二段	起	きむ	ゐる	く	くる	人(ヒト)	くれ
	落	ちむ	つる	つ	つる	葉(ハ)	つれ
	戀	ひむ	かすむ	ふ	ふる	人(ヒト)	ふれ
	恨	みむ	わめふ	む	むる	事(コト)	むれ
	老	いむ	かゞまる	ゆ	ゆる	身(ミ)	ゆれ
	下	りむ	ゆく	る	るる	人(ヒト)	るれ
第四 下二段	得	えむ	そむる	う	うる	寶(タカラ)	うれ
	受	けむ	とる	く	くる	物(モノ)	くれ
	瘦	せむ	おとろふる	す	する	身(ミ)	すれ
	捨	てむ	やる	つ	つる	物(モノ)	つれ
	寢	ねむ	やすむ	ぬ	ぬる	床(トコ)	ぬれ
	添	へむ	おくる	ふ	ふる	物(モノ)	ふれ
	譬	へむ	たぐふる	ふ	ふる	事(コト)	ふれ
	消	えむ	ゆく	ゆ	ゆる	雪(ユキ)	ゆれ
	枯	れむ	まがむ	る	るる	草(クサ)	るれ
	植	ゑむ	はやむる	う	うる	苗(ナヘ)	うれ
第五 加行變格	來	こむ	き かよふ	く	くる	人(ヒト)	くれ
第六 佐行變格	為・坐(オハ)	せむ	し まさる まもる	す	する	業(ワザ) 君(キミ)	すれ

第七	第八		第九
奈行變格	良行四段一格	これまでの八種を作用言とふ これより二種を形状言とふ	くしき
往 死	有 居		浅 深
(な) む	(ら) む		(く) なりふ なむ
(に) ぬぶる らする	(り) て きだまる		(し)
(ぬ)			
(ぬる) 人[イト] 命[イノチ]	(る) 事[コト] 人[ヒト]		(き) 心[コヽロ] 心[コヽロ]
(ね) (ねれ)	(れ)	(ね)のことハ別記に云べし	(けれ)

第十
しくしくしき
戀 悲
(く) まる ちしよ
(し)
(しき) 事[コト] 事[コト]
(しけれ)

上に擧たる指掌圖をよく〳〵よみこゝろえてハ其俗意をさとらでハすみやかに心得がたし さるゆゑに十種活用おしなべて俗意をあてゝ童蒙のたよりとす但し連體言ハ結詞[ムスビコトバ] 結辭[ムスビコトバ]とハ係辭[カヽリコトバ]をむすぶことばの名なりされどそのことハ今こゝにみなさしおきてたゞつとめて圖面の俗意をさとらんを要とすべし あるをのこ俗解せり さるハさ(く)花、お(す)車、などゝつゞくの類ハいふまでも今ハかゝることなくして別に俗解をせざるなり

あらざるバぞかし

又こゝろふ心うべきことハ終止言をかりふ(輕)と記して示す連體言ハ(重)と記しはるて示せそハ四段活用、一段活用ハ終止と連體とをかね(アハセ)て圖せれバ早く見るもあなりよくよく讀(ヨミ)て味はふべし

加行四段

活用	語	口語	例
將然	さ(か)む	サ(カ)ウ	めでやまつらしも咎(トガメ)ふなつてこギヤやうて一兩日のうちふ花がサ(カ)ウ
連用	さ(き)にほふ		今日ハ花がさうつギヤ大(オホ)きこしさ(き)にほひマス
終止 連体	さ(く)	サキマス サクワイ	(輕)風ハさむいが花ハサキマス (重)あつさいあら花があまたのやうふサクワイ
已然	さ(け)	サイタガマア	きのふこそ花ハサイタガマア

佐行四段

活用	語	口語	例
將然	お(さ)む	オ(サ)ツ	この車ハたいさう都合よい車ギヤと見えてつだらそオ(サ)ツ
連用	お(し)やる		おもい車とみゆるがやうくのことぞお(し)やりマス
終止 連体	お(す)	オシマス オスワイ	(輕)道がよいから車ハオシマス (重)おもい車ダケガあのやうにオスワイ
已然	お(せ)	オシタガマア	よくこそあの重い車をオシタガマア

多行四段

活用	語	口語	例
將然	た(た)む	タ(タ)ウ	かう風が吹てハめをも見てハ居られまいサアくはやくタ(タ)ウ
連用	た(ち)そへる		何事の出來(シユツライ)たやらんあの人ハ見物(ケンブツ)をそろけてた(ち)そへてマス
終止 連体	た(つ)	タチマス タツワイ	(輕)物をみてハ居られないからハタチマス (重)そこまてハ飽(アキ)はいうことこのやうにタツワイ
已然	た(て)	タツタガマア	其場をさえむめもせずらにタツタガマア

波行四段

活用	語形	例
将然	あ(は)む　ア(ハ)ウ	いろ〳〵あそびたいこともあるぢゃがまづ明日茶屋でア(ハ)ウ
連用	あ(ひ)みる	どうもあはれぬことと思うたが今日ハうれしくあ(ひ)みマス
終止 連体	あ(ふ)　アヒマス　アフワイ	(断)またしばしまちをるさいチヨツとアヒマス (連)かたらひ約束せしところのやうにアフワイ
已然	あ(へ)　アフタガマア	けふこそうれしく アフタガマア

麻行四段

活用	語形	例
将然	す(ま)む　ス(マ)ウ	このやうなきたない家には永く居る氣ハナイガマアチヨツとス(マ)ウ
連用	す(み)すみつる	住まはるだ〳〵この家ハ住て居ておけなくすまへもす(み)すてマス
終止 連体	す(む)　スミマス　スムワイ	(断)ながく〳〵居らいがチヨツとスミマス (連)よい家ぢやからこの家ハこれこのやうにスムワイ
已然	す(め)　スンダガマア	今までとこらへてこの家ニスンダガマア

良行四段

活用	語形	例
将然	ふ(ら)む　フ(ラ)ウ	たいさう雲が出て來たぢややがて大雨がフ(ラ)ウ
連用	ふ(り)くる	まつくらになつて大雨がふ(り)きマス
終止 連体	ふ(る)　フリマス　フルワイ	(断)後ほどぬれるやうガ一度ハフリマス (連)ひどいぬれぢやこれこのやうにフルワイ
已然	ふ(れ)　フツタガマア	夜の間にこそあのやうに雪がフツタガマア

加行一段

活用	語形	例
将然	(き)む　キ(ヤ)ウ	秋風がたつてやゝうすさむしくなつたぢや袷を(き)(ヤ)ウ
連用	(き)ならそ	あたらしい衣服なれどもそぞろにぞ一両日(き)ならしマス
終止 連体	(きる)　キマス　キルワイ	(断)衣服が出來たならキマス (連)さらあたらしいやぢやが衣服ながられこのやうにキルワイ
已然	(きれ)　キタガマア	若き時こそこのやうなきれいな衣服もキタガマア

奈行一段

將然　(に)む　(ニ)ヤウ

先生のおことわりを見ならうたら後ハよく(に)ヤウ

連用　(に)かよふ

先生のふりを見ならうて居る故か講釈のふりがよくにかよひマス

終止・連体　(にる)　ニマス　ニルワイ

(輕)講釈のふりをならふてさ故だん／＼く先生ニニマス

(重)骨折たところで先生の講義ぶりにあまりのやうにニルワイ

已然　(にれ)　ニタガマア

先生のを見なされたならバこそ講釈ぶりがよくニタガマア

波行一段

將然　(ひ)じ　(ヒ)ヤウ

大きうよい天気ぢやこの日ようならほしものがよく(ひ)ヤウ

連用　(ひ)からぶる

大気がきつう強ばうて去ならば今も(ひ)からびマス

終止・連体　(ひる)　ヒマス　ヒルワイ

(輕)天気がよいからほしものが今日ハよくヒマス

(重)晴天になつて故ほし物があれあのやうにヒルワイ

已然　(ひれ)　ヒタガマア

天気がよかつたからこそ乾物がよくヒタガマア

麻行一段

將然　(み)む　(ミ)ヤウ

その書もみたい書物ぢやが今日ハ見られぬ明日ハ(ミ)ヤウ

連用　(み)あきらむる

書従つもりてよんだ故かむづかしい書をまどおちつまらぬ(み)あきらめマス

終止・連体　(みる)　ミマス　ミルワイ

(輕)今日ハひまぢやによつて書をミマス

(重)此書ハおもしろい書ぢやからそれあのやうにミルワイ

已然　(みれ)　ミタガマア

今日こそあくまで書物をミタガマア

也行一段

將然　(い)む　(イ)ヤウ

弓を射たいものぢやが今ハそがしうてならぬひまを見て(イ)ヤウ

連用　(い)と得る

弓場というものハおもしろい所ぢや諸も中も(い)と得しマス

終止・連体　(いる)　イマス　イルワイ

(輕)下手でハあるが尺貳の的ならイマス

(重)巧者ハあれバかけ鳥でもとまるのやうにイルワイ

已然　(いれ)　イタガマア

尺貳の的であればこそやうくイタガマア

和行一段

将然 ゐむ　井ヤウ
世話になるのハ至つて氣の　ぶくおやが去るがなゐゐ
よう！　井ヤウ

連用 ゐつく
あの人ハつとめなまなゐゐ　もじめハ氣をゐんゐゐゐや
ゐつきマス

終止・連体 ゐる　井マス　井ルワイ
ゐるつとめなまなくゐゐるゐへ　井マス
ゐる御家の奉公ゐゐゐた　しいるまこのやうに井ルワ　イ

已然 ゐれ　井タガマア
ように奉公さゐれバこそ十年　ゐゐすりも井タガマア

加行中二段

将然 おきむ　オキヤウ
最早夜があけるぞや　おきキヤウ

連用 おきつる
夜があけてきたる　ワイとゐりの人がオ　きゐでマス

終止 おく　オキマス
夜があけたゐゐオ　キマス

連体 おくる　オキルワイ
いそがしゐゝ早朝　おこまとこのやうにオ　キルワイ

已然 おくれ　オキタガマア
用事があればこそ　早くオキタガマア

多行中二段

将然 おちむ　オチヤウ
柿がたいさうりんで　来たぞや採らずにお　ちたらおちヤウ

連用 おちつる
落葉しまうとあるたゐる　いりめがやたらつてゐく　木の葉がおちつりマス

終止 おつ　オチマス
風がふゐゐゐ柿が　オチマス

連体 おつる　オチルワイ
熟した故柿があき　あのやうにオチルワイ

已然 おつれ　オチタガマア
昨夜の大風がふいたさ　まればこそ今朝ハ柿が　たくさんオチタガマア

波行中二段

将然 こひむ　コヒヤウ
子供ゐあそぶにたび　ゐたつゝこなさいさだめて　コヒヤウ

連用 こひつかなしむ
親のない子ハあそれる　ものぢや時々ゐのひと　てコヒかなしミマス

終止 こふ　コヒマス
あハ誰バいよく人を　コヒマス

連体 こふる　コヒルワイ
祭してもくださまと　またくしへられるの　やうにコヒルワイ

已然 こふれ　コヒタガマア
おなくさう御出があな　きればこそこくしへ　兩三日コヒタガマア

麻行中二段

將然	うら(み)む　ウラ(ミ)ヤウ からみがくおもふなる…… ウラ(ミ)ヤウ
連用	うら(み)おもふ 夫の心が薄情ぢやとみえて女房が毎日々々 ウラ(ミ)あひマス
終止	うら(む)　ウラミマス うらむなといふても……ウラミマス
連体	うら(むる)　ウラミルワイ あなたが不實…… ……ウラミルワイ
已然	うら(むれ)　ウランダガマア ……ウラン ダガマア

也行中二段

將然	お(い)む　オ(イ)ヤウ ……物を心配し……顔が……オ (イ)ヤウ
連用	お(い)かゞまる つよい男であつたが年がよつて腰が二重に お(い)かゞまりマス
終止	お(ゆ)　オイマス 年がよるのハとあ……オイマス
連体	お(ゆる)　オイルワイ 年がよれバあきれる物ぢやあきあのやう にオイルワイ
已然	お(ゆれ)　オイタガマア あまり心配あそれバ……三年オイ タガマア

良行中二段

將然	お(り)む　オ(リ)ヤウ さむい風がふく中を 二階からオ(リ)ヤウ
連用	お(り)ゆく 二階ハいやぢやといふて ……下へお(り)ゆきマス
終止	お(る)　オリマス 只今二階の御用がすみ次第すぐにオリマ ス
連体	お(るる)　オリルワイ 二階ハ萬事不自由ぢやとみえてあれ あのやうにたびたび オリルワイ
已然	お(るれ)　オリタガマア 二階ハいやぢやさうにのこらずそこそ下まで オリタガマア

阿行下二段

將然	(え)む　(エ)ヤウ 今年ハ商法をようしてたくさんな利を (エ)ヤウ
連用	(え)そむる 商法をよくする中に今年ハ正月から利を (え)そめマス
終止	(う)　エマス 商法がよいから利を エマス
連体	(うる)　エルワイ 商法がよいからこれこのやうに利をエル ワイ
已然	(うれ)　エタガマア 商法がよけれバこそ 大利をエタガマア

加行下二段

将然 う(け)む　ウ(ケ)ヤウ

金銀でハいたゞかうと
ない品物ならウ(ケ)
ヤウ

連用 う(け)とる

代料でハうけられるい
ゞ品物ぢやうけとつて
(け)とりマス

終止 う(く)　ウケマス

品物ぢやからウケマス

連体 う(くる)　ウケルワイ

誠にありがたい御心
ざしぢやうけられる
やうにウケルワイ

已然 う(くれ)　ウケタガマア

品物ぢやからこそ
キノドクナがらウケ
タガマア

佐行下二段

将然 や(せ)む　ヤ(セ)ヤウ

いつもつらくせぢやから
夏ふなつたらバさだめて
ヤ(セ)ヤウ

連用 や(せ)おとろへる

夏がすぶくせぢやから
ちょうどない日々ふや(せ)
おとろへマス

終止 や(す)　ヤセマス

夏にあるといつもの
くせでヤセマス

連体 や(する)　ヤセルワイ

くせぢやふようて夏
になるとつまるのや
うふヤセルワイ

已然 や(すれ)　ヤセタガマア

夏がきたならバこそ
またくへヤセタガ
マア

多行下二段

将然 す(て)む　ス(テ)ヤウ

こんなやうな物ならうり
とんでも買人がないな
からス(テ)ヤウ

連用 す(て)やる

用がないならこの
やうなものハす(て)やり
マス

終止 す(つ)　ステマス

きたないものぢや
からステマス

連体 す(つる)　ステルワイ

いらぬものぢやから
こまこみゆうにステ
ルワイ

已然 す(つれ)　ステタガマア

きたないものぢやと
思へバこそ
ステタガマア

奈行下二段

将然 ね(ね)む　(ネ)ヤウ

大きうふびまし
たらやく(ネ)ヤウ

連用 (ね)やすむ

いそがしうてくて
いまからく早く(ね)や
すみマス

終止 (ぬ)　ネマス

夜が更るからネマス

連体 (ぬる)　ネルワイ

酒ふゑうたとミえて
あれあのやうにネル
ワイ

已然 (ぬれ)　ネタガマア

くたびれたらくそ
昨夜ハよくネタガマア

波行下二段

將然	そ(へ)む	ソ(ヘ)ヤウ	ここまでハ進物がよくないから今一品をそ(へ)ヤウ
連用	そ(へ)おくる		ここまでハ進物がよくないから又一品をそ(へ)おくりマス
終止	そ(ふ)	ソヘマス	品がよくないから又一品ソヘマス
連体	そ(ふる)	ソヘルワイ	品物がよくないからこれらのやうにソヘルワイ
已然	そ(ふれ)	ソヘタガマア	品物が不足ぢやからこそあのやうな物をもソヘタガマア

麻行下二段

將然	ほ(め)む	ホ(メ)ヤウ	此度の狂言ハよく出来た狂言ぢや世間でホ(メ)ヤウ
連用	ほめたてる		此度の狂言ハ大出来なりとて世間でハほめたてる
終止	ほ(む)	ホメマス	狂言がおもしろいからホメマス
連体	ほ(むる)	ホムルワイ	狂言がおもしろいのハ誰もたれもこそあまりあのやうにホメルワイ
已然	ほ(むれ)	ホメタガマア	見た狂言がよければこそ大きうホメタガマア

也行下二段

將然	き(え)む	キ(エ)ヤウ	たいさうに雪がつもつたが春になつてからキ(エ)ヤウ
連用	き(え)ゆく		春になつてあたゝかになつて故去年の雪がだんだん(え)ゆきマス
終止	き(ゆ)	キエマス	あつくなつたら雪がキエマス
連体	き(ゆる)	キユルワイ	春の雪ハふつてもつもらないあれあのやうにキエルワイ
已然	き(ゆれ)	キエタガマア	春になつたればこそ高山の雪もだんだんキエタガマア

良行下二段

將然	か(れ)む	カ(レ)ヤウ	そらぼにおいてある草がふりつもつて冬になつたならカ(レ)ヤウ
連用	か(れ)をむ		あをくて草も冬が来たならバことごとくか(れ)をちマス
終止	か(る)	カレマス	冬になつたらくさ草がカレマス
連体	か(るる)	カルルワイ	霜がふつてハなすびなどもこれらのやうにカルルワイ
已然	か(るれ)	カレタガマア	紛やうのなすびなどの草も霜がふつてからこそあとかたもなくカレタガマア

和行下二段

將然 う(ゑ)む　ウ(ヱ)ヤウ

早苗が大きくのびてきたら一両日のうちにう(ゑ)ヤウ

連用 う(ゑ)そめむる

早苗がうゑごろになつたゆゑ吉日ゆゑ今日より う(ゑ)そめマス

終止 う(う)　ウエマス

日がらもよいから早苗をウエマス

連体 う(うる)　ウエルワイ

水が十分に行きわたらねばどこでも苗をあまたの様にウエルワイ

已然 う(うれ)　ウエタガマア

上手の早少女なればこそこの田へよくウエタガマア

加行變格

將然 (こ)む　(こ)ヤウ

あの人ハ何とてこのやうにおそいのヂヤさりとも今に(コ)ヤウ

連用 (き)つづらふ

道がとほいから我が家へハ人が(き)つづらひマス

終止 (く)　キマス

出むかひがよいから我が家へ人がよくキマス

連体 (くる)　クルワイ

友だちといふものハなつかしいものヂヤ雨のふるにもあまたの様にクルワイ

已然 (くれ)　キタガマア

やうやくのことでここまできたハキタガマア

佐行變格

將然 (せ)む　(セ)ウ

まことにおもしろいことヂヤアドウ(セ)ウ

連用 (し)たる

運のよいものハあくせくせずとも一生つまらなく(し)てマス

終止 (す)　シマス

よい人といふものハ別段あるものでもないことばかりシマス

連体 (する)　スルワイ

あやしい人ハ別段がや年がよつても毎日のつとめをあまたのやうにスルワイ

已然 (すれ)　シタガマア

よい人こそかやうな善事もシタガマア

將然 おはせむ　オハセウ

御なちあそばしたびの日数もつもりおしたゆゑごろんどうにオハ(セ)ウ

連用 おは(し)ませ

遠路をものともなく御着にておいでなさる　おは(し)まします

終止 おは(す)　オハシマス

我君ハ只今このところにオハシマス

連体 おはする　オハスルワイ

悲苦をあつてござる君ハ別段がや遠路をも歩行てあまたのやうにオハスルワイ

已然 おはすれ　オハシタガマア

悲苦をなさる君なればこそかやうな国までもオハシタガマア

奈行變格

將然	連用	終止	連体	已然
い(な)む　イナウ	い(に)ける	い(ぬ)　イニマス	い(ぬる)　イヌルワイ	い(ぬれ)　イニダガマア
そのやうに難渋ならいつしかうなのつまそイ(ナ)ウ	足よをぎヤれどにながい道中ハい(に)まびマス	けふハはやくことぞ故郷ゑイニマス	長旅ふつきてハと見えてやうくの體でかへるのやうにイヌルワイ	おこなハゐくいるけバこそ遠路のところへもイニダガマア
し(な)む　シナウ	し(に)する	し(ぬ)　シニマス	し(ぬる)　シヌルワイ	し(ぬれ)　シンダガマア
吐ト・グの病ぢやまうてとてもかなわぬヂヤやがてシ(ナ)ウ	はやり病ハこまつたものヂヤ多くの人がし(に)ゥセマス	あの人ハ病がおもつたヂヤもうしやシニマス	つよい人でも病でハあつけなくあまあのやうにシヌルワイ	病なればこそつよい人でもシンダガマア

良行四段格

將然	連用	終止	連体	已然
あ(ら)む　ア(ラ)ウ	あ(り)つく	あ(り)　アリマス	あ(る)　アルワイ	あ(れ)　アッタガマア
氣をもんでも別りよいことハあいまいさのまゞでア(ラ)ウ	あありせがよくなりふあたゞつてよい所ゑあ(り)つきマス	運のよい人いつもあありせがよくてアリマス	またうしの身分ハおりうなのでゞヂヤ今も繁昌でこれとのやうにアルワイ	運がよければこそよいおあはせもアッタガマア
を(ら)む　ヲ(ラ)ウ	を(り)さだまる	を(り)　ヲリマス	を(る)　ヲルワイ	を(れ)　ヲッタガマア
どこに居てよいやら席がわからぬいまアあぶらくここにヲ(ラ)ウ	席がきまつたところゑてたのくを(り)さだまりマス	御召のあるまでハこゝにひかへてヲリマス	御召のあるまで門出もいつもぢこまるのやうにヲルワイ	御召があるまでこゝでここにひかへてヲッタガマア

形状言俗解

活用　くしき

連用　あさ(く)なのふ
そなくても不實ぢやからこなくてもあさくなりひマス

終止　あさ(し)　アサイヂヤ
さうく骨をりぬをこゝまでい心ざしがアサイヂヤ

連体　あさ(き)　アサイワイ
事が成就せまいこころざしがあさきあのやうにアサイワイ

已然　あさ(けれ)　アサイガマア
氣がうつりやすけれバこそあの人ハこゝろざしがアサイガマア

活用　しくし

連用　ふか(く)たのむ
あなたにおぎりまとおりふしあふくてくしんふか(く)なのミマス

終止　ふか(し)　フカイヂヤ
あの中うに骨をるをこゝまでい心ざしがフカイヂヤ

連体　ふか(き)　フカイワイ
事がたちまち成就するやうなこゝろざしがふかきあのやうにフカイワイ

已然　ふか(けれ)　フカイガマア
うまくいつたらまあくバこそあの人ハこゝろざしがフカイガマア

連用　こひ(しく)ある
久しうあはねバこひ(しく)ありマス

終止　こひ(し)　コヒシイヂヤ
久しうあはねばコヒシイヂヤ

連体　こひ(しき)　コヒシイワイ
久しうあはぬ母さへこひしきやうにコヒシイワイ

已然　こひ(しけれ)　コヒシイガマア
おもふ人にあはねバこそ此頃ハいらうコヒシイガマア

しき活用

連用 かなしく おもふ	情にせまれば涙こぼるゝまでかなしくおぼゆ マス
終止 かなし カナシイ ぞや	情にせまるゝべかなし イギヤ
連体 かなしき カナシイ ワイ	情にせまればこれのやうにカナシイワイ
已然 かなしけれ カナシイガ マア	情にせまればこそわりなくかなしけれ シイガマア

形状言くしき活用 しくしき活用 の詞のあるじは本書活語の條下にクシ［キ］、シク、シキ、とあるしたるは省略せるにてクシキケレ、シクシキシキシケレ、とつくべきなれどもさてはあまりことしげくなるまでこまかになればはぶけるなり心得て見るべし

〇この書本書活語の條下にあらはせる活用などやうのこまかなることはむねとかく図にあらはせりこれらにあきたらずはその別記を見るべし別記なるはくはしくあきらかならむ時は詞の活用辭の運用とをあきらかにあらはしたるなり

文科大學教授
編輯權[illegible]木村正辭
權少外史横山由清
總裁
岡本保孝
神祇大録
文學博士小中村清矩
榊原芳野
文學博士黑河真頼
同撰
間宮永好
塙忠韶

終

明治十五年七月十七日　翻刻御届
同　年十一月　出版

翻刻出版人　大阪府平民
藤原熊太郎
南區二ツ井戸町濱
廿二番地

仝
前川善兵衛
東區南久寳寺町
四丁目八番地

仝